

令和4年 神奈川県広報コンクール最優秀作品の概要

1 【広報紙・市部】 厚木市「広報あつぎ」（3月1日号）

【主たる記事の掲載意図】

世界中でジェンダー平等が叫ばれる中、感染症の影響で女性の雇用悪化や育児の負担増加、自殺者数の増加など、貧困や孤立など社会が抱えてきた課題が浮き彫りになりました。その背景には、社会に根付く「男は外で仕事、女は家事・育児」という性差による固定観念の押し付けがあり、その偏りは女性だけでなく男性やセクシャルマイノリティの生きづらさにもつながっています。そこで、3月8日の国際女性デーに合わせ、固定された性役割を取り巻く課題は何かを考えました。

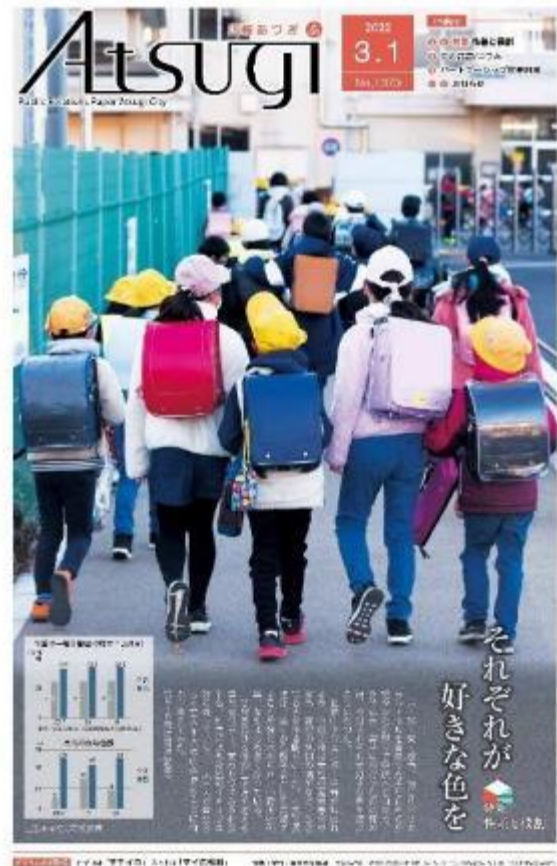
全体を通して、固定的な性役割にとらわれず、多様性を尊重し合う社会に向けて、一人一人に何ができるかを考えてもらうことをねらいとしました。

【講評】

3月の国際女性デーに合わせて、固定された性役割を問う特集で、自治体の広報紙という枠を超えて一般のTVやネット等のメディアの特集と比べても、非常に優れていると感じました。ポイントは、

- ① タイミング 国際女性デーという時節話題に合わせた特集である事
- ② トレンド 昨今若い世代を中心に関心が集まっているテーマである事
- ③ オリジナリティ 厚木市ならではの情報が全てが構成されている事
- ④ 多様な意見 「固定された性役割は良くない」というのではなく、賛否両論共に載せている事
- ⑤ チャレンジ 自治体としてテーマにするには勇気ある企画に挑む姿勢

特に、④⑤は、通常は自治体という立場上、「クレームが来ないように無難にしよう」や、「性役割の決めつけは良くないと啓発しよう」と、上から目線になりがちですが、紙面には「女性らしさを求めたって良いじゃないか」という意見も含め、様々な世代・立場の方の意見がフラットに並び、まずはみんなが考えるきっかけを作る事がゴールに設定されています。



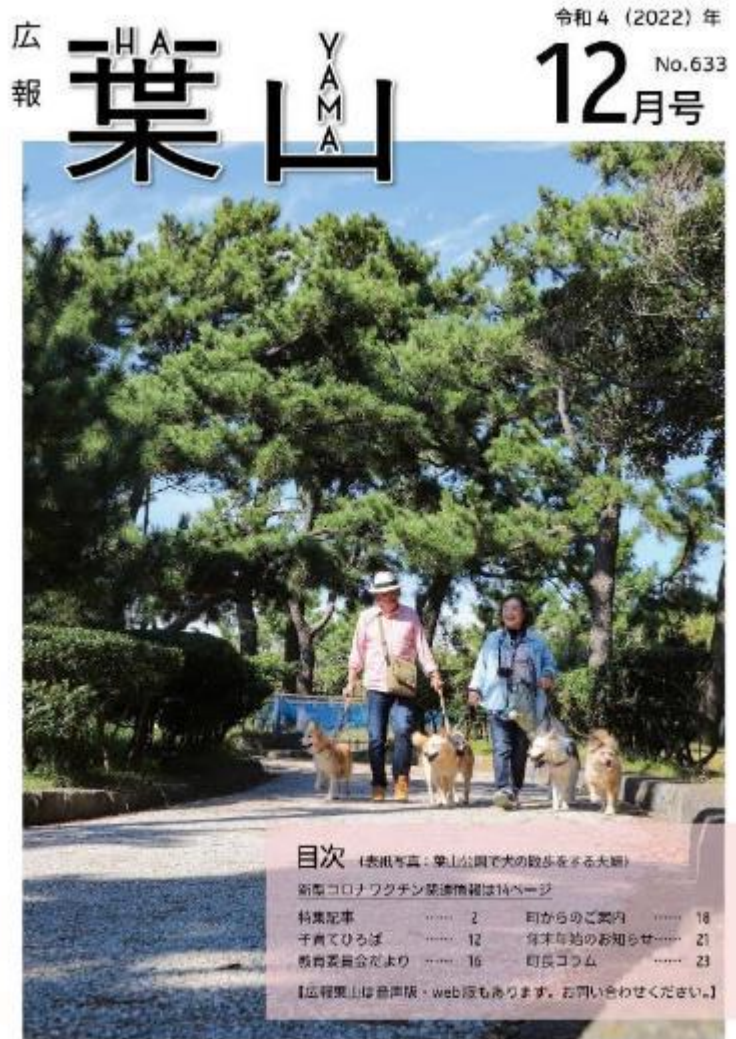
2【広報紙・町村部】葉山町「広報葉山」（12月1日号）

【主たる記事の掲載意図】

命の大きさは人間も動物も同じです。しかし、犬などのペットたちは、飼い主に手放されてしまうと、一人で生きていくことはできません。ペットを飼うとき、私たち人間は「大切な命を預かる」覚悟が必要なのです。

葉山町は犬の飼育率が県内1位です。一方で、神奈川県では殺処分ゼロを達成しながらも、毎年何らかの事情により保護される保護犬はいまだ200頭以上にのぼる現実があります。そこで、これからも犬とともに生きる町として、保護犬とその犬たちを守る人の活動から大切な命について考える特集としました。

保護犬といつかわいそうなイメージを持つ方が多かったり、犬が嫌いな人もいたりする中でも「人もペットも、幸せになるために一緒にいる」ということに注目し、犬を飼っている人も飼っていない人も、読んだ後に温かい気持ちになれる記事を目指しました。



目次 (表紙写真：葉山公園で犬の散歩をする犬親)

新型コロナウイルス感染症情報は特ページ

特集記事	2	町からのご案内	18
千歳てひるば	12	有年各地のお知らせ	21
教育委員会より	16	町長コラム	23

【広報葉山は音声版・web版もあります。お問い合わせください。】

【講評】

犬の飼育率1位ということで組まれた保護犬の特集です。殺処分ゼロを目指して奮闘している人たちの実態に迫る記事、さらに飼わないボランティア、里親など多様な立場の人たちのインタビューが立体的に保護犬の実態を浮かび上がらせる充実の内容で、つい読んでいて目頭が熱くなりました。犬の写真のBefore Afterで、犬にも感情がある事が見てすぐ理解でき、飼い主へのお願いの手紙まであり、この特集を読んだら、動物を飼う事に責任を負う事がきちんと理解できます。

行政の支援内容についても非常に丁寧に記載されていて、市民の安心につながる構成なのも良かったです。

担当者の思いが伝わってくる点を大いに評価しました。



4 【広報写真（組み写真）】 厚木市「広報あつぎ」（12月1日号）



【掲載意図】

第 37 回教育奨励賞で文部科学大臣奨励賞を受賞した、厚木市立毛利台小学校のインクルーシブ教育の取り組みを伝える特集面です。12 月 3～9 日の障がい者週間に合わせ、学校で垣根なく過ごす子どもたちと、それを支える先生の日常を組み写真で紹介することで、誰もが暮らしやすい環境とは何かを考えるきっかけとなる紙面作りを目指しました。

学習に不安のある児童らが通常の学級を離れ、少人数で学ぶ様子が伝わるよう、教室全体が分かる引きの写真が大きく配置しました。そこで見せる子どもたちの真剣なまなざしや、生き生きとした表情、多くの子どもたちが自由に入出入りする様子を併せて掲載しています。また、特別支援学級の児童が通常の学級のみんなと一緒に、はつらつと体育の授業を楽しむ姿や、落ち着いた表情で給食を味わう様子を掲載しました。

紙面全体を通して、苦手なことなどがあっても、周りの理解と支えがあるので、誰もが垣根なく生き生きと過ごせることが伝わるような表情や場面の写真を選定し配置しています。

【講評】

垣根のない学校というテーマにあった写真を選んでいるところが良いです。また、レイアウト自体は奇抜ではありませんが、写真が内容に沿ってレイアウトされており、1点1点の写真がとても生き生きして訴えてくるものがあります。

5 【映像】 平塚市「ひらつかシングス Vol.7 人と自然を結ぶ場所づくり」



【主な内容・あらすじ】

本作品では、地域の人と自然を結ぶ新しいコミュニティの場を構築する「草木循環 Labo」の淵田貴寛さんをクローズアップしました。市外から移住してきた淵田さんが中心となり、地域の人たちと共にホテル復活に向けて取り組む「弁天池再生プロジェクト」や、苔玉アートのワークショップなどを紹介し、地域活動によって生まれる人びとのつながりとその温かさを描いています。

【制作意図】

人と自然をつなぐ新しいコミュニティのカタチ、イキイキと楽しそうな表情をした市民、そして移住者が考える平塚市の魅力を広く視聴者に知ってもらいたいと意図しました。

取材対象者である淵田さん自身の魅力も多く表現しつつ、地域の方々にも多数出演してもらうことで、「地域の絆」が映像として現れるよう意識しました。また、映像の最後を淵田さんのインタビューシーンにすることで、地域活動の中心となっている人物の考えを視聴者に印象付ける構成としました。



【講評】

平塚市の作品は新旧住民をつなぐ「社会統合」のための「交流・交渉」の「実践者」（リンカー）の「活動」（3点セット）をかなり濃く描いているという意味で評価に値します。登場人物の語りも「自分の言葉で話している」ので説得的で、リアリティーも感じられる作品となっています。